

航空機向け販売過去最高

大和合金 オーバーホール需要増

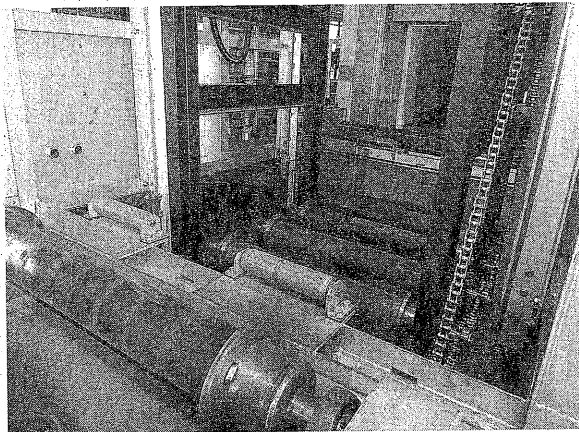
23年見通し

特殊銅合金メーカーの大和合金(本社||東京都板橋区、荻野源次郎社長)は、2023年の航空機向け材料の販売量が過去最高になると見通す。新型コロナ禍からのオーバーホール需要の回復によるもので、欧州やシンガポール向け的好調さが

けん引すると予想。航空機向けの生産ラインもフル稼働が続く。先行きも受注拡大が期待され、今年6月には航空機向け材料の生産に適した自動水冷装置付きガス炉をグループ会社の三芳合金工業(本社||埼玉県三芳町)に導入した。

足元の需要も過去最高だった19年を上回る勢いで、地域別では欧州や中国向けが堅調に伸びている。アジア地域のオーバーホール業務の集積地であるシンガポール向けも好調。加えて、北米地域でも米国の格安航空会社(LCC)のオーバー

ホールを多く手掛けるメキシコや米国の流通関連の堅調さが寄与している。荻野社長は「新型コロナ禍だった21年は前年比3分の1になるなど販売量が大きく落ち込んだが、完全に復活した」と話す。先行きも航空機の需



新導入のガス炉で冷却水槽への運搬が自動化した

要予測の見方が強いことから販売伸長に期待。特に北米地域は成長余地があるため、こ

らなる拡販に向けて取り組む(同)考えた。こうした高まるニーズにこたえるため設備投

資にも力を注ぐ。銅合金開発・製造の三芳合金工業には自動水冷装置付きガス炉を導入。||エヌケー社(本社||新潟市北区、高橋清志社長)製で、備え付けのエレベーターにより炉から冷却水槽への搬送が自動化。急冷までの時間短縮化で合金組織を制御しやすくなり、強度など製品性能を引き上げられるようになった。炉の増設で生産能力も向上。従業員の安全性についても運搬の自動化で、従来のフォークリフトによる作業と比べて高められた。